

ように思われないが8%から1.7%位のものまでいる(渡部泰明、中村慎吾両氏が広島県産の標本に基いて前胸背の斑紋、翅鞘の斑紋の変化をまとめておられるが翅鞘の変化は大体鳥原産の傾向に似ている“広島虫の会々報、№15:165-167, 1976”)。

(付記)本報文は1977年に姫路昆虫同好会誌“てんとりむし”に原稿として送ったが同会が休会状態なので若干補足してまとめたものである。

三 木 市 内 の ギ フ 蝶

小 倉 滋

今年も、3月14日頃より、室内飼育のギフチョウが次々と羽化して、次々と飛んでゆく。屋外のものも、3月28日にさなぎから脱出した殻がみられたので、自然のものも羽化しているであろう。

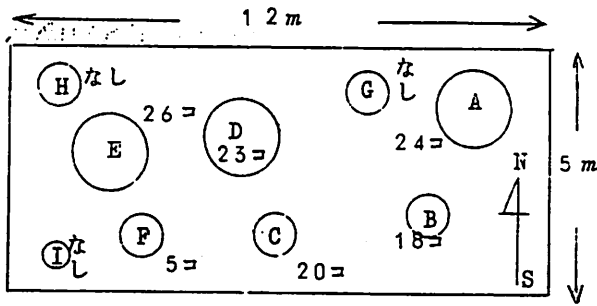
かつて、三木市広野地区では、“春の女神”といわれる美しいギフチョウが多く見られ、午前中はゆつたりと低く、午後は、高くすばやく飛ぶ姿が見られたという。

しかし、開発によつて、このギフチョウも激減した。

日本の特産種といわれるこのギフチョウは、氷河時代の生き残りの特徴を多く備えた貴重な蝶で、第三紀ごろ、分布が定まったといわれている。カンアオイ属を食べて、アジア洲に広く分布していたと考えられているが、その食草の分布から考えて、第四紀の氷河時代に海流の影響をうけ、比較的温暖であつたと考えられる日本を残して絶滅してしまつたらしい。三木地方では、中新世紀層の神戸層群(三津田累層淡河累層)と、その上部を覆う新世紀の大阪層群からなり、山地は、酸性土壌のやせ地で、赤松を主体に、二次林は暖帯広葉樹林におおわれている。樹相も貧弱であるが、ここに74種の蝶が確認されている。

小生は、ギフチョウの調査を、成虫の採集場所で確認するやり方を信用できず、食草確認は困難であるが、たんねんに産卵を確認することで生存を推定することにしている。食草となる産卵植物は、ヒメカンアオイであるが、これは、東播磨の加古川東岸流域に多いものである。食草の群落は、地歴に合致しており、第1次河岸段丘下位部の、日光が適当にあたり、水分は保水力は良いが、排水のよい部位に生育し、地歴的には、ヤマホトトギスやウラシマソウ、ミスミソウなどの植物と混生している場合が多いし、周辺の植物として、エビネランなどがみられる。

ギフチョウの産卵場所での生育状況を観察した結果は次のような状況である。



項目	群落	A	B	C	D	E	F	計
産卵数	4月21日	24	18	30	23	26	5	126
ふ化数	5月2日	22	18	27	21	25	5	118
体長4%	5月5日	2.1	1.7	2.7	1.5	2.1	5	10.8
	5月8日	1.4	3	1.2	1.0	2	4	4.5
3期眠	5月26日	8	0	9	0	0	4	21
終令幼虫	6月5日	3	0	6	0	0	3	12

昨年度の飼育記録は産卵4月21日、ふ化5月2日、5月7日一期眠、5月27日蛹化、3月24日に羽化した。

5月27日から、9ヶ月という長い間、蛹でいるが、休眠は温度に影響されることが多く、温度が、15℃～16℃以下であれば、体質の変化はおこらず、恒温槽で23℃で育てると、顕微鏡観察下で次第に脂質が変化して、成虫変移がみられ、1月には成虫となった。

6月5日の調査では、すでに生存状況は一部に満たず、9ヶ月にわたる蛹の時代や、終令虫時代の天敵による被害を考えれば、生き残るのはわずか数匹にすぎないと考えられる。

天敵は、クモ、ダニ、寄生蜂、小鳥等々が考えられるが、飼育中に発見した天敵として、最も恐ろしいものは「ナメクジ」であった。ナメクジがどのように食害するのかは、この動物が夜の活動をするため、まだ観察ができていないが、ナメクジだけのいる食草の幼虫が全滅しているのを見ても、その害は明らかである。その他、クモも、幼虫・成虫の大敵であり、食草を求め歩いた幼虫が、クモの巣にぶら下がっている姿を見るのも痛々しい。

このように、自然の、厳しい生態系の下で、大古を生きぬいたギフチョウは、三木市内でもひっそりと生き続けている。氷河期の短い夏に、あわただしく育ち、きびしい環境下をじつと耐え、生

き抜いたたくましさ、その美しさからは想像できない。三木市内に残る数少ない貴重な自然を、大切にしたいものである。

県下最初の採集記録

小林桂助

私が昆虫採集に熱心であつたのは大正13年頃から昭和8年頃までであり、その後は鳥類の研究に転向したので昆虫とは疎遠となつた。しかし当時採集した標本は虫害をうけることもなく今日でも完全な形でキャビネットの中に残っているのもその中から県下としては最初の記録になると思われるもの数種を以下に報告する事とした。

ここ数年は鳥の調査に出かける毎に昆虫にも注意を払っているが、自宅に近い六甲や摩耶では目星しいものに出会う事がない。しかし昔は交通の便の悪かつた但馬や丹波の山々にも容易に行ける時代となり、ハヤシミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、ウラクロシジミ、キマダラルリツバメ、ヒサマツミドリシジミ、ウスイロヒヨウモンモドキ、ホシチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリなど往年は県下としては採集の困難であつた蝶をも比較的容易に採集することが出来るようになったのは喜ばしいことである。

キベリハムシ

兵庫県特産種として有名な甲虫であり、最初の採集記録は昭和の初期（昭和8年頃）と報告されている様である。所が筆者はそれより先大正15年8月に澁区篠原北町の自宅付近（当時は武庫郡六甲村字家ノ東）でススキの葉上に止つていた1頭を採集しているので、これが恐らく最も古録になることと思う。なお昭和45年8月16日には但馬の関宮町で3頭採集することが出来たがこれが県下の分布としては北限ではなからうか。

セジロカミキリ

全国的に見ても比較的少ない種類であるが、私のキャビネットの中に昭和6年7月に自宅で採集した1頭が収められている。当時ペランダの燈火に飛来したものを採集した時の記憶は50年近くの過去のことでありながら生き生きとしている。兵庫県下の記録としては最も古いものではなからうか。

ギフチョウ

県下のギフチョウの分布については山本広一氏により詳しく報告されており（月刊むし、1971